

試論・ワープロ辞書を点検する —生活者としての視点から—

小 林 美恵子

(はじめに)

昨年、私は個人用ワープロ（日本語ワードプロセッサ・シャープ「書院」WD-600）を購入した。この時期、職場の同僚、研究会の仲間などの幾人かが同様にさまざまな機種 of 個人用ワープロを購入し、使い始めている。'86年8月23日～9月6日の朝日新聞ウィークエンド経済紙に連載されたワープロ紹介記事によれば、今年のワープロ出荷は前年の倍の200万台になる可能性があり、そのほぼ80%がパーソナルタイプであるとのこと。手元に届く手紙・印刷物のなかにかんりの量のワープロ文字が見られることも考えあわせて、今や私たちの日常生活の中にワープロはかなりしっかりと位置づき、その機能を発揮するようになってきていると言えよう。

ところでワープロの持つ諸機能の中で、かなで打たれた文字や熟語を漢字に変換するということは、《日本語》ワープロとしての、言わば代表的な機能の一つである。前記の記事によれば、「書院」WD-600クラスのワープロではほとんどの機種がJIS第二水準の漢字を内蔵し、7,000以上の文字・記号を持ち、辞書も、熟語を含んで五万～十数万語を持っているという。辞書に関していえば、五万語というのは、日常的に最も利用されることの多い小型国語辞典の持つ語数にほぼ匹敵すると言ってよく、したがって通常の範囲の文書づくりには充分である筈だし、また実際にそれはワープロの一つの宣伝文句にもなっている。

ところが、しばらくワープロによる作文を続けてみて気がついたのは、ワープロ辞書の持つ語彙と一般的な国語辞典の持つ語彙とは必ずしも一致しない、というよりはかなりのずれがあると言う事実である。例えば、私は幼児を保育所に預けているので、育児、保育あるいは保育運動などに関する文章を作ることも多いのだが、その中で「子育て」「母乳」「助産婦」などの語がわが「書院」WD-600では変換されないということを発見した。このワープロの場合、説明書によれば、かなから漢字への変換は《漢字にしたい語句の前に接頭語以外の語句をつ

けると正しく変換されません。助詞、助動詞は語句に含めても変換されます。》とある。一応文節を変換の基本単位としているといっていよいが、「～すること」「～ている」「気になる」などのように文節を越えて変換される慣用的な言いかたもある。

ところで前記の3語はいずれも一文節に含まれるものであるのにもかかわらず変換しない。「子育て」の場合「子」と「育て」それぞれの要素は変換する。これらをそれぞれ1語と見て「子育て」を2文節と見るべきかとも考えられるが、同様の構造を持つ「国語辞典」「保育問題」「手作り」などは一語として変換する。「母乳」の場合も「母子」「牛乳」は変換するので、この語が変換されないのは語構造の故でなくワープロ辞書の語選択の問題であることは明らかである。語選択といえば「助産婦」を変換せず「産婆」を変換するというこのワープロ辞書の選択にも少々首をかしげたくなる。これは時代錯誤というものではなかろうか・・・。

こんなことを考えるのは私だけだろうかと思っていた矢先、「快傑ハウスハズバンド」等の著書のあるフリーライター村瀬春樹氏が、ある講演^(注1)の席で同じようなことを話されるのを聞いた。氏もやはり「書院」の一機種を使っていると言われたように覚えているが、「分娩室」が変換されないこと、「味噌」が出て、「みそ汁」が出ず、工業製品である「化学調味料」が変換されて「だしこんぶ」「にぼし」「かつおぶし」が出ないことなどを挙げて、ワープロ辞書の作り手が日常的生活を担っていない——味噌汁も作ったことがないような——人々なのだろうと断罪しておられたのが興味深かった。また、氏によれば、彼のワープロではこのような食品、育児などに関する日常的な語を変換しない反面、経済関係用語などについてはかなり特殊なものでも変換するとのことであった。

ワープロがもともとオフィス・オートメーション化の一機材として開発されてきたということから考えれば、初期のワープロにおいて育児や食事に関する語よりは企業で使用される機会の多い経済用語の変換が優先されたということはいわずける。しかし今やワープロは決して特別な人々——いわゆる《経済人》のみに使われるものではなくなりつつある。ごく普通の家庭でさまざまな職業を持つ人、

持たぬ人がさまざまな個人的用途に使い始めている。用途に応じて特別な辞書機能を備えた機種もあるというが、一般の人間は常にただ一つの用途にのみワープロを使用するわけではないだろう。そのように考えると、現在の一般的なワープロ辞書の語選択に本当に偏りがあるならば、それは是非ただされなければならない。本稿ではそのような視点にたって、ことに経験的に見出された育児用語や食品をあらわす語の不変換を中心に、ワープロ辞書の語選択の偏りを幾つかの簡単な調査によって明らかにしたいと思う。なお、ここであらかじめ「変換」という語について定義しておきたい。本稿における「変換」とは「その語を読み方どおりに入力して変換キーを押すことにより正しい漢字になおされる」ことである。例えば「子育て」は「こ」（子）と「そだて」（育て）はそれぞれ変換されるが「こそだて」と打っても漢字には変わらないので「変換」しないことになる。また「母乳」は「はは」「ちち」のように読み方を変え、分けて打てば出るが、このようなものも「変換」しているとは言えない。「娩」も区点入力という特別な操作により漢字化できるが、「分娩」が変換されたことにはならない。上記のような《操作》によってほとんどの語は漢字化することができるから、実際の文書の仕上がりという意味では一語で変換しないということとはさほど問題にはならないことが多い。が、ある種の分野を示す語についてのみ漢字化のために特殊な《操作》が必要であるとすれば、そのこと自体が問題であると言いたい。

（経験的実態《調査》から）

妊娠・出産・育児に関連する語 70 語、食物を表す語 160 語をひらがな入力し変換の状態を見た。これらのうち前者では 19 語、後者では 79 語が変換されなかったが、これらの語はいわば思いつくままに打ったということなので、ここではこの数字自体を問題とはしない。ただ、これらの変換に見られる特徴・問題のみを挙げておく。（以下 ◇印は変換したもの、◆印は正しい漢字に変換しなかったもの）

- ◎◇流産 ◇切迫流産 ◇早産 ◇墮胎 ◇妊娠中絶 ◇人工流産 ◇出産
◇胎児 ◆ぶんべん（分娩） ◆たたい（多胎） ◆そうせいじ（双生児）
◆さかご（逆子） ◆たいばん（胎盤）

・・・流産・中絶関連語に詳しいが、「墮胎」などより、よく使われると思われる「分娩」は変換せず。「娩」が常用漢字外であるためかと考えられるが、後に挙げる魚の名など常用漢字でなくても変換するものもある。「多胎」以下生まれてくる子の状態をさしたり「胎盤」のように分娩について語るとき欠くことのできない語も変換しない。

◎◇産婆 ◆じょさんぷ（助産婦） ◇保健婦 ◆さんか（産科） ◇産婦人科
◎◇粉ミルク ◆ぼにゅう（母乳） ◆ふんにゅう（粉乳） ◆ほにゅう（哺乳）
◇乳房 ◆ちくび（乳首） ◆にゅうじゅう（乳汁） ◇授乳 ◇人工栄養
・・・母乳が見直されてきている時代だというのにワープロ・ベビーはあいかわらず人工栄養主義か・・・？

◎◇保母 ◆ほふ・・・男性保育者も増えている。ちなみに「母」「父」のつくことばを挙げて見ると・・・◇母子 ◇父子 ◇母権 ◇父権 ◇母性愛 ◇父性愛 ◇母子家庭 ◆ふしかてい（父子家庭） ◇母子保健法 ◆ふしほけんほう（父子保健法）《これはなくて当然》◇賢母 ◆けんぷ（賢父） ◆じぼ（慈母） ◇慈父 ◆げんぼ（厳母） ◇厳父・・・よく使用される語であるかどうかは別として、対（つい）になっている語として入力してみた。「慈父慈母」などということばは廃れたということだろうが、「慈母観音」などということばもワープロには無用なのだろうか。

◎◇塩漬 ◇粕漬 ◆味噌付け ◆砂糖付け ◆茶づけ ◆ぬかづけ
・・・漬け込む材料によって「漬」「付」とかわったり、変換されない語もあるなど減茶苦茶という感じである。

◎◇味噌 ◆みそ汁 ◇豆腐 ◆とうふじる ◆とんじる（豚汁） ◇澄まし汁
・・・「汁」についても「漬」と同様。さらにいえば「味噌汁」は味噌を入れ、「豆腐汁」は豆腐を入れるという認識の欠如した語選択という気もしないでもない。

◎◆なっとう ◇甘納豆・・・なぜこうなるか。不可解。

◎◇大豆 ◇小豆 ◆くろまめ（黒豆） ◇ジャガ芋 ◆ばれいしょ（馬鈴薯）
◆山しょう（山椒） ◆かたくり（片栗） ◆うり（瓜） ◆かぼちゃ（南瓜）
◆すいか（西瓜） ◆なし（梨） ◆おうとう（桜桃） ◆こんぶ（昆布）
・・・特殊な読み方である、常用漢字にないなどそれなりの説明はつくが、次の

魚の名と比べていただきたい。

◎◇鰯 ◇鰺 ◇鯖 ◇鰹 ◇鮎 ◇鰻 ◇鮭 ◇蟹 ◇鮫

・・・これらはいずれも常用漢字外の文字である。並ぶ魚偏の文字を見て八百屋よりは魚屋、いや寿司屋向きと連想してしまうのは偏見か・・・。

◎◆にぼし（煮干し） ◆かつおぶし（鰹節） ◆けずりぶし（削り節）

◆だしこんぶ（出し昆布） ◆しょくべに（食紅） ◇化学調味料

◇合成着色料 ◇合成甘味料 ◇合成保存料 ◆こなせっけん（粉石鹼・・・「粉ミルク」は出る。「石鹼」も出る。なぜ「こなせっけん」なのか、これも不可解） ◇合成洗剤・・・工業製品の変換のほうが圧倒的によい。和語よりは漢熟語のほうが変換しやすいことは考えられるが、それにしても生活感覚としては首を傾げざるを得ない。

以上の結果から、それぞれの語については常用漢字外の読み方であるとか、和語であるとか、漢字の読み方が特殊であるとか理由がつけられることはあるにしても、全体としての語の選択に日常生活を取り仕切っていく者の感覚——いわば生活者としての視点が欠如しているのではないかという問題提起は納得していただけるだろう。

（『現代用語の基礎知識』'86年版による調査）

次に、以上の提起をもう少し具体的に数値化してみるために簡単な調査を試みた。自由国民社から毎年発行される『現代用語の基礎知識』は、その編集方針によれば、(1)一般新聞雑誌や日常生活のなかで使用頻度が比較的多いと思われる語、使用頻度が多くなくても我々が良識として一応心得ておくべき社会各方面の重要な用語を(2)体系的に各部門各項目に分類して配列し、解説したということである。いわば分野別にワープロによく打ち込まれる語を見いだすにはぴったりのテキストといってもよいだろうと思う。そこで、この調査では最新版のこの本の下記の各部門について、外来語（カタカナ・ひらがな・ローマ字のみの表記のもの）、2文節以上の語を除いた全見出し語を、その読み方どおりに入力して漢字への変換の有無・状態を調べた。

(部 門)

日本政治用語・・・政治（132語） 婦人問題用語・・・婦人（42語）
 日本経済用語 }・・・経済（109語） 食生活用語・・・食生活（58語）
 経済理論用語 } 家事用語・・・家事（11語）
 社会福祉用語・・・福祉（18語） 育児用語・・・育児（59語）

各部門の全体に対する変換した語の割合を、語に含まれる漢字の字数別に整理してみた。

	政治	経済	福祉	婦人	食生活	家事	育事	合計
漢字一 字	0 ／1				2 ／3		2 ／2	4 ／6
	0				66.7		100	66.7
漢字二 字	18 ／19	22 ／23	1 ／1	2 ／3	11 ／15	2 ／2	3 ／7	59 ／70
	94.7	95.7	100	66.7	73.3	100	42.9	84.3
漢字三 字	12 ／20	7 ／11	0 ／0	1 ／1	7 ／13	1 ／3	7 ／12	35 ／60
	60	63.6	0	100	53.8	33.0	58.3	58.3
漢字四 字	46 ／54	33 ／35	5 ／5	7 ／10	14 ／17	1 ／2	9 ／13	115 ／136
	85.2	94.2	100	70	82.4	50	69.2	84.6
漢字五 字	14 ／21	18 ／26	4 ／5	6 ／7	2 ／4	1 ／3	4 ／9	49 ／75
	66.7	69.2	80	85.7	50	33.3	44.4	65.3
漢字六 以上	0 ／17	0 ／14	0 ／7	0 ／21	0 ／6	0 ／1	0 ／16	0 ／82
	0	0	0	0	0	0	0	0
合 計	90 ／132	80 ／109	10 ／18	16 ／42	36 ／58	5 ／11	25 ／59	262 ／429
	68.2	73.4	55.5	38.1	62.1	45.4	42.4	61.1

※ 上段……変換した語数／全語数 下段……%

この表からわかるように、経済用語は73.4%とやはり群を抜いた変換率を示している。ついで政治用語がよく変換され、家事・育児・婦人問題用語の変換率は低い。ただ、ここで考えておかななくてはならないのは、6字以上の熟語が1語も変換されていないこと、福祉・婦人問題や育児に関する語に6字以上の熟語の割合が比較的高いことである。――6字以上の熟語については「無認可保育所」のように変換するものもあるので、凡て6字以上は変換せずという基準があるわけではないと考えられる。――そこで、つぎに各分野の語における6字以上の熟語の割合と、漢字1～5字（十かな）の語についての変換率を示した。

	政治	経済	福祉	婦人	食生活	家事	育児	合計
％	12.9	12.8	38.9	50.0	10.3	9.1	27.1	19.1
％	78.3	84.2	90.9	76.2	65.4	50.0	58.1	75.5

※ 上段……6字以上の熟語の占める割合

下段……漢字1～5字の語の変換率

6字以上の熟語の割合の高かった福祉用語、婦人問題用語は漢字1～5字（十かな）のものについては変換率がぐっと高くなっている。特に福祉用語では90.9%という高率を示している。しかし、それに続くのはやはり経済用語であり、政治用語であり、家事・育児・食生活などに関する語の変換率は低い。

次に変換されなかった語をもう少し詳しく見ていくと、どの分野にも共通して次のような語が見られた。

- (1) カタカナと漢字の混じっている語（以下《カ》と略す）
- (2) 固有名詞を含む語《固》
- (3) 漢数字を含む語《数》
- (4) 3語以上の語が複合してできた語《複》
- (5) 常用漢字外の漢字が使われている語《常》

つまり、これらは分野を問わず変換されにくい要素だといえる。もっともこれらの要素を持った語はすべて必ず変換されないということでは、勿論ない。さらにまた、これらのいずれにもあてはまらないが変換されないという語も多数存在

する。それらは純粋に語選択の問題として、いわば選ばなかった語ということになる。(1)～(5)のほかにそのような語がどの程度あるか、ということも変換における分野差を考えていくための一つの重要なポイントとなるだろう。

次に各分野における不変換の語をあげて分野別の特徴を見ていく。

(政治用語)

《略》政調会 保・保連合 核禁会議 《固》田中判決 田中復権論 創政会
《固・複》中曽根総裁声明 《固・カ》新自由クラブ
《固・略》勝手連 《数》党三役 第一読会 《数・複》非核三原則 一事不再
議 《複》新中期政策 名簿登載順位 稼働中原発容認論 etc
《その他》多党制 有責議員 党籍証明 (3語)

以上の通り、《その他》は3例のみ。「自由民主党」「自民党」「日本社会党」「社会党」「日本共産党」「共産党」「公明党」「民社党」は、それぞれ《固》(《略》)であるが変換する。

(経済用語)

《固・カ》ガリバー型独占 ノーベル経済学賞 《固・略》対中輸出
《略》産研 《数》第一次産業 第二次産業 第三次産業 財界四団体
《数・略》三全総 《複》可処分所得 国内総生産 国民総支出
《その他》なし。ただし《複》「付加価値生産性」における「付加価値」は変換せず。《固》(《略》)であるが、「日経連」「経団連」「経済同友会」は変換する。

(福祉・婦人問題用語)

～問題 ～報告 ～条約 ～研究 ～法のような形の6字以上の造語が多いので全体の変換率が低いが、これらを除くとよく変換する。5字以下のもの及び《その他》については、婦人問題用語では「復氏」「夫婦別姓」「夜業条約」「父子家庭」「国籍法改正」の5語、福祉用語では「障害者福祉」1語のみ変換しない。

(食品用語)

この分野にはカタカナ＋食品・料理・飲料・類という形の造語が多いのが特徴的である。これらは「ジャガ芋」「粉ミルク」のようにひらがなで打ってカタカナに変換するというわけにはいかないが、「カタカナ＋しょくひん」というような形で打てば変換する。ただ、それらの中でも以下の語は変換しなかった。

《カ》ネオ玄米 貴腐ワイン アルファ化米 地ウイスキー

《カ・複》国産麦パン 《固》中国茶・・・「中国酒」は変換する。

《常》顆粒しょうゆ 胚芽米 《複》過酸化脂質

《その他》地養鶏 豆乳 点心 新玄米 氷温乾燥 特殊用塩（6語）

（家事用語）

《数》四群法 三世代同居 《複》分離型同居 心理的欠損家庭

《その他》自助具 兼業主婦（2語）

（育児用語）

《常》嘔吐 緘黙児 《複》浸出性体質 冬季下痢症 微細脳損傷 アトピー性
体質 胸腺リンパ体質 自家中毒症 老人病症状 etc

《その他》保父 孤食 犬食い 母原病 無友病 過熟児 初語異変 退行現象
（8語）

上記のうち《その他》にあげられた語がいわば「選ばれなかった語」になるわけだが、政治用語に3例2.3%、経済用語には1例もないのに対して、食生活用語6例10.3%、家事用語2例18.2%、育児用語8例13.6%と、いずれも10%をこえていることが目につく。もっとも例としてあがってきた語を見ると、政治・経済の分野では新語が生まれる場合、例えば ～法 ～条約 ～論のような形で～の部分には既に在る語が入るというような形をとることが多いのに対して食生活・家事・育児の分野では必ずしもそうではなく、通常複合語としてよりは一語として認知されているような語の部分を変えたり（保父 過熟児）、シャレたり（夢遊病→無友病）、たとえたり（犬食い）と、かなり自由な造語も行われている。このことがこれらの語、それを含む分野の変換のされ難さにつながっていることは考えられる。

（実際に文章を打ってみると・・・新聞記事による調査）

さて以上の2つの調査によって明らかになった分野による変換率の差は、実用の際どの程度の影響を及ぼすものであろうか。手近にある新聞記事を実際に打って比較してみた。使用したのは朝日新聞'86年9月21日の経済欄及び料理記事

(おそうざいのヒント) それぞれ約400字ずつ。これらは特定の意図なく目についたものを選んだものである。読み方通りに打ち込み、新聞記事どおりの表記がなされることをもって変換したとする。原則として含まれる漢字が5字以下の語については一語として入力し、6字3語以上の複合語についてはなるべく大きな単位にくぎって入力するようにした。入力した単位毎に／の記号をいれてある。またカタカナを含む語についてはカタカナ部分はカタカナで漢字部分はひらがなで打った。数字を含む語についても同様である。なお、原文は縦書きで、数字は全て漢数字による表記であるが、以下にあげる全文では横書きへの変更と共に、数字も「むっつ」などと和語で読んでいる場合と月数を除いては算用数字に直した。

(経済記事)

全国の／雇用天気図は、／北海道を／除くと／おおざっぱに／いって／“東高西低”の／模様になっている。／北海道と／同様に／国鉄の／余剰人員や／石炭問題などを／かかえる／九州や、／造船業の／集中する／瀬戸内／工業地帯が／苦境に／陥っている。／近畿地方の／失業率が／今年に／入ってから／高く、／3％台にあるのも／気になる／動きだ。／

自動車産業の／本拠地である／東海地方でも、／求人の／落ち込みが／目立つ。／経済企画庁が／八月下旬に／まとめた／地域経済／動向によると、／(地域／経済動向によると・ちいきけいざいどうこうに) 東海地方の／六月の／有効求人／倍率は／(有効／求人倍率は・ゆうこうきゅうじんばいりつは)／(季節調節済み)／1.07倍。／全国の／ちいきべつブロックの／(／地域別／) 中では／高いほうだが／(高い／方だが) 前月に／比べた／落ち込み幅は／0.04ポイントと／一番／大きく、／自動車産業に／求人の／手控えムードが／広がってきたことを／示している。／関連産業の、／裾野が／(すそ野が) 広い／自動車産業に／雇用不安が／出始めた／影響は／大きい。／じどうしゃそうれんは／(自動車／そうれんは／) 円高の／進行為／アメリカを／中心とする／海外での／現地生産に／拍車を／かけ、／国内の／雇用機会を／減らしていくことに／不安を／強めている。／

(390字・83入力単位)

(料理記事)

でざかりの／(出／盛りの)野菜を、／豚肉と／共に／みそあじで／(みそ／味で)仕上げます。／ご飯に／よく／合う／おかずです。／お弁当にも／向きます。／

ナス／4個の／(200グラム)／ヘタを／取り、／縦に／六つに／切り、／水に／放して／アクを／抜きます。／ピーマン／4個の／(100グラム)／種を／取り、／縦に／1センチ幅に／切ります。／豚肉薄切り／200グラムを／5センチ／長さに／切り、／ショウガじる／(ショウガ／汁)少々、／しょうゆと／酒／各／こさじ／(小／さじ)1を／ふりかけておきます。／あかみそ／(赤／みそ)50グラム、／砂糖／おおさじ／(大／さじ)1.5、／酒／おおさじ／2.5を／合わせておきます。／

フライパンを／熱し、／油／おおさじ／半分を／加えて、／ちゅうびで／(中火で)ピーマンを／いためます。／酒／おおさじ／1を／ふり、／しんなりしたら／取り出します。／油／おおさじ／1.5を／加えて／ナスを／いため、／こんがり／やきいろが／(焼き／色が)ついたら／取り出します。／油／おおさじ／1を／足して／豚肉を／いため、／肉の／色が／変わったら、／合わせた／みそを／加えて／みその／香りを／出し、／ナス、／ピーマンを／戻して、／しるけが／(汁／気が)なくなるまで／いため／合わせます。／

(365字・101入力単位)

アンダーラインをひいた部分が記事の原文どおりには変換しなかった語である。経済記事には5語、料理記事には8語、このような語が見られる。両記事の文字数からみても、料理記事の方が変換されにくいといってよいと思われる。しかも入力単位の数から言えば経済記事の方が1単位は長いのに変換されやすいわけである。なお、この他にどちらの文章にも、原文ではひらがな表記なのに入力時に変換キーを打つと漢字でのみ表記される語が相当数あり、これらも厳密には変換されないと言うべきだろうが、変換キーのかわりに単に無変換のキーを打つことによりひらがな表記になるものについては変換しない語とは数えなかった。ただし経済記事の「すそ野」のみ「裾野」を回避するためには「すそ(無変換キー)

／野（変換キー）」と2度の操作が必要なので変換しない語に入れた。

経済記事の不変換の語の中には「地域別ブロック」のようなカタカナ混じりの長い複合語や「自動車総連」のような《略・固》もある。「高い方だが」は本来2文節として数え、入力するべきだろう。それに対して料理記事の不変換の語はいずれも短く、それ自体で1語1文節と数えられるようなものばかりである。また、これらは少なくとも料理関係の文章においてはごく普通に用いられる語であると思われる。現に「大さじ」「小さじ」などは繰り返し出てくる。「出盛り（る）」「中火」「焼き色」なども小型国語辞典にも見出し語として載せられている語である。こうしてみると、このパーソナル・ワープロを使用する料理関係者はやはり経済関係者に比してハンディを負っていると言わざるをえないのではなかろうか。

（おわりに）

以上のように、いささか趣味的に行った2つの調査ではあるが、結果からワープロ辞書には明らかに得意、不得意の分野があることがわかった。勿論、前にも書いたように、これらは幾つかのキー操作によって問題を解消できることが多いし、よく使う語については使用者辞書に登録することにより簡単に打ち出すことも可能である。個人が独自の使用者辞書を作り自分に合ったワープロを作り上げていくことこそがパーソナル・ワープロの面白さだという考え方もある。^(注2)しかし、それはそれとして、もとなる辞書機能に極端な偏りがあるのは、やはりうなずけることではない。しかもその偏りが日常生活を軽視し、企業本位の語選択であるとするならば、ある時点まではともかく、そこから先のワープロ普及には限界があるかもしれないなど思うのは偏見じみているだろうか。

使用する人の興味、立場などによって、使用される語には存外偏りがあるものだと思う。その意味で本稿に今まであげてきた語が、ワープロ辞書の持つ語として誰にでも必要であるとは必ずしもいえないかもしれない。

しかし、少なくとも小型国語辞典の持っている語ぐらひは、特別な操作の要なく変換してほしいとはいってもいいだろう。

もっとも、全分野にわたって、ワープロ辞書に本当に極端な偏りといえるもの

があるのかという点についてはもう少し深く、多角的な調査の必要はあろう。本稿では、日常的に使われる語の変換傾向を調べるのに『現代用語の基礎知識』によったが、これだけの資料では、十分な見解を導くには足りないということはいうまでもない。また、いわゆる基礎語の変換率も調べてみる必要があろうし、分野的にも、例えば科学用語などはどのような変換のしかたをするのか、興味を感じる。それらに調査を広げ、深めていくことを今後の課題としたい。さらに、また他機種についてはどうなのかも調べてみたいと思っている。

なお、ワープロ辞書の機能については企業秘密だそうで、何万語登録されているのか、どのような語が変換可能なのか、また変換する語の選択基準はなにかといったことは取扱説明書などにも一切記述がない。使用者としてはこれも非常に不可思議なことであり、語選択が言語的なある基準によって行われているのではなく、むしろ機械的な能力の拡大・開発の結果としてある——それゆえ企業としては機械的な能力の範囲は秘したい、即ち辞書能力は秘するということになるのかななどと、考えさせられてしまうのである。

(注1) '86年8月9日 雑誌『We』主催の夏季フォーラム講演

(注2) 『ワープロ書齋術』西尾忠久 講談社現代新書